

知求会ニュース

2014年9月

第51号

◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

菅野直和(*KANNO Naokazu*) (国際学部国際社会学科・7期生)さんが、2014(平成26)年7月1日(火)にキングス・カレッジ・ロンドン(英国)で、以下のように学位を取得されました。なお、知求会ニュース第52号の「博士録」コーナーで博士論文の概要を掲載します。

学位名 ; Ph.D in International Relations, Conflict and Peace Studies

(国際関係・紛争・平和学博士)

学位番号 :

学位授与機関 : King's College London

学位授与日 : 2014年7月1日

論文名 : Critical Early Warning: Reframing the Study and Practice of Conflict Early Warning (批判的早期警報: 紛争早期警報の研究と実践の再構築)

◎ 入選、おめでとうございます！

福田一夫(博士後期課程第2期生)さんが、第6回放送大学学生エッセイコンテストに佳作入選しました。作品名は「人生の勝利に向けて、未来への誓い」でした。なお、全文は放送大学ホームページに掲載されています。

(http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/essay/pdf/6th_10.pdf)

◎ 教職員人事異動

小堀 朋彦さん

3年3か月在籍されていた事務部 総務係長の小堀さんが7月1日付で宇都宮大学附属図書館利用者サービス係長に異動されました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。在職期間中は大変お疲れ様でした。後任には、工学部 専門職員から奈良橋 真さんが総務係長として着任されました。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊(平成26年6月13日発行)23面に、「「ハラル食」を吟味」と題して、「宇大・マレーシアの留学生 鬼怒川温泉のホテル視察 イスラム圏から誘客を」の内容で、友松篤信先生とシャヒダ・アティラ・ビンティ・スハイミさん(国際学部4年)の記事が掲載されました。
2. UU now34号(平成26年7月20日発行)5面に、「特集 宇都宮大学基盤教育センター ラーニング・コモンズ」の中で、「授業の外でも学びは常に成立する」の内容で、湯本浩之先生の記事が掲載されました。(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/34/4-5.pdf>)

3. UU now34号(平成26年7月20日発行)10・11面に、「研究 keyword」コーナーで、「石油が支える非民主的統治ー中東政治経済研究ー」の内容で、**松尾昌樹**先生の記事が掲載されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/34/10-11.pdf>
4. UU now34号(平成26年7月20日発行)14面に、「HANDSの成果を取り入れた国際学叢書を刊行!!」の内容で、**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。
<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/34/14-15.pdf>

◎ 国際学部だより

1. UU now34号(平成26年7月20日発行)4面に、「特集 宇都宮大学基盤教育センター ラーニング・コモンズ」と題して、**荒井絵里菜**さん(国際社会学科・3年生)の記事が掲載されました。
<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/34/4-5.pdf>

○刊行案内

1. **丁 貴連**先生が単著で「媒介者としての国木田独歩ーヨーロッパから日本そして朝鮮へー」(484頁)を翰林書房から本年2月に刊行されました。詳細は、以下をご覧ください。
<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/faculty/p4.html>
2. 留学生・国際交流センターの戚 傑先生が下記の通り共著書を刊行されました。
Qi, Jie (戚 傑). Surveillance and Normalization : Policies and Pedagogies of Japanese Language Education for Immigrant Children. In M. Pereyra and B Franklin(Eds.), Systems of Reason and the Politics of Schooling : School Reform and Sciences of Education in the Tradition of Thomas S. Popkewitz (Routledge International Studies in the Philosophy of Education) (pp.333-353). Oxford / New York: Routledge, 2014年4月.
3. **大関清太**先生(元教養部助教授・工学部名誉教授)が単著で「数の森 ゼロから無限大の不思議」(174頁)を里文出版から本年8月に刊行されました。

前回は第50号発行記念特集として、鯨井先生、北島先生、石澤先生の寄稿を掲載しました。今回は、国際学部設立20周年・国際学研究科設立15周年を記念して**田巻松雄**先生に寄稿をお願いしました。

特別寄稿

「国際学研究科長になってからの1年半」

田巻 松雄

まず、今年3月に国際学研究科博士後期課程の3人の学生が学位(国際学)を取得したことを報告したい。博士後期課程は2007年4月に開設し、2010年3月に最初の学位取得者を出している。これで、博士後期課程学位取得者は12名となった。ここ2年は連続して4名の取得者を出している。今後とも、博士後期課程の指導に於いて着実な成果を出していきたい。

昨年4月に国際学部長・国際学研究科長に就任して約1年半が過ぎた。最も大変だった作業の1つは、ミッション再定義の作業である。これは、文部科学省がすべての国立大学法人に対して「特色、強み、社会的役割」を定義することを課した宿題であった。国際学部・国際学研究科は「学際分野」に属する学部・研究科として教育、研究、社会貢献における特色や強みが問われた。

今年に入り、楽しみながら準備を進めてきたのが、国際学部設立20周年および国際学研究科設立15周年を記念する書籍および資料集の刊行である。書籍は教員が各自の「研究と教育」を綴ったエッセーと学部・研究科の特色あるプロジェクトを紹介するコラムから構成されている。『世界を見るための38講 - 38 lessons for Engaging The World』（下野新聞社）として10月に刊行予定である。資料集『国際学部20年・国際学研究科15年の歩み』は、簡易年表、同窓会の歩み、特色あるプロジェクトの詳細、歴代学部長からのメッセージなどを盛り込み、学部20年と研究科15年の歩みが分かりやすく見られる内容となっている。資料集も10月に刊行予定である。この2つの作業は、別々の観点から学部と研究科の現状と課題を考える良い機会となった

この1年半は、学部と研究科両方に関わる研究・教育環境の改善に取り組んだ。いくつか紹介したい。

第一に、昨年度、教員の研究成果を国際学叢書として刊行するための支援制度を新設した。その最初の成果物は、拙書『地域のグローバル化にどのように向き合うか - 外国人児童生徒教育問題を中心に - 』であり、下野新聞社からこの3月に刊行された。内山雅夫前学部長が考案された旧制度での国際学叢書支援の成果も、高山道代『平安期日本語の主体表現と客体表現』（ひつじ書房、2014年2月）となってあらわれている。国際学叢書支援は、今年度までは2つの制度の下で同時進行し、来年度からは昨年度新設した制度に一本化される。

第二に、優秀な卒業論文と修士論文を表彰する制度を立ち上げた。昨年度は試行の年度でもあり、学部長・研究科長である自分が1人で20数本の推薦論文を読み、最優秀卒業・修士論文と優秀卒業・修士論文を選考し、表彰した。時間はかかったが、力作に触れる楽しさも満喫した。現在、システマティックな選考方法を検討中であり、知求会と学部同窓会のご協力と支援を頂きながら、学部・研究科の教育・研究成果向上のための制度として充実を図っていきたい。

第三に、国際学部・国際学研究科の組織的な研究活動を発展させるために、「国際学部共同研究組織支援制度」を発足させた。ミッション再定義でも学部・研究科の共同研究の実績が問われた。「国際学部共同研究組織」とは、本学部・研究科を研究拠点として共同研究を推進する研究組織を指す。今年度4つの研究組織に対して研究費を配分した。

最後に、博士前期課程の最近2年間の入学者の動向をみておきたい。過去2年間の入学者の選抜・国籍別内訳をみると、平成25年度入学者32人のうち、一般選抜5人（日本3、中国1、ベトナム1）、外国人留学生特別選抜22人（中国18、モンゴル2、ベトナム1、

台湾 1)、社会人特別選抜 3 人(日本 2、中国 1)、国際交流・国際貢献活動経験者特別選抜 2 人(日本 1、中国 1)、平成 26 年度入学者 33 人については、一般選抜 7 人(中国 3、日本 2、ベトナム 1、ペルー 1)、外国人留学生特別選抜 20 人(中国 20)、社会人特別選抜 4 人(日本 3、アルメニア 1)、国際交流・国際貢献活動経験者特別選抜 2 人(日本 2)となっている。選抜形態別では、外国人留学生特別選抜が平成 25 年度 68.7%、平成 26 年度 60.6%、国籍別では、外国籍の人が平成 25 年度 81.5%、平成 26 年度 78.7%となっている。留学生も外国籍の人も大歓迎であるが、全体的にバランスがどうかという見方も出来る。設立 15 周年を迎え、現状も踏まえながら、国立大学として国際学分野の学問を広く学べる本究科の特色をどのように打ち出していくか、検討を重ねていきたい。

(2014 年 8 月 20 日原稿受理)

研究室訪問 42 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 42 回には留学生・国際交流センター所属の湯本浩之先生にお願いしました。

「開発教育：地球的諸問題の解決に向けて」

湯本 浩之

昨年 4 月に留学生・国際交流センターに着任して以来、1 年半が経とうとしています。まだ、国際学部で演習や卒論の授業を担当していないせいか、「研究室」としての体裁が整っていないように感じています。いずれにしても、「研究室」として今後掲げていきたい分野として、拙稿では「開発教育」についてご紹介してみたいと思います。

さて、この「開発教育」という活動をご存じでしょうか。「教育」とは言え、たとえば、中学や高校の学校教育の中で、教科として位置づけられてきたものではないので、これまで授業という形で開発教育に接した経験のある人はきわめて少ないでしょう。大学教育の中でも単独の科目として開講されることは珍しいのですが、「国際理解教育」や「グローバル教育」は近接した教育分野と言えます。

「開発教育」とは、英語の **Development Education** を日本語に直訳した用語ですが、日本語の語感からは、今ひとつその意味や内容を理解することが難しいようです。環境教育や人権教育、あるいは平和教育などであれば、誰でも耳にしたことはあるでしょうし、その意味や内容を多少でも理解できるのではないかと思います。しかし、開発教育となると「聞いたこともない」し、「全然分らない」のが実情のようです。開発教育では何を学ぶのかと言えば、それは、環境教育では環境問題を学び、人権教育では人権問題を学ぶように、開発教育では開発問題を学ぶことになるのですが、この「開発問題」もまた環境問題や人権問題に比べると分かりにくい概念のようです。

日本語で「開発 (develop+ment)」というと、古くは「新田開発」という言葉がありま

したが、今日では、野山をブルドーザーで切り拓いて、道路や宅地を造成していくようなイメージがつきまどってしまい、説明に苦慮します。英語の **develop** とは「封を開ける」が原意で、個人が秘めている個性や可能性を形に表していくという意味から、「発達（する）」や「発育（する）」という意味が生まれました。この「開発」という言葉が国際協力の分野に転用されるのは、第二次世界大戦後のことなのですが、そもそも「開発教育」とは、1970年代に一部の国連機関や欧米の開発 NGO によって始められた教育活動です。

第二次世界大戦後、アジアやアフリカなどの旧植民地からは、多くの国々が念願の政治的独立を果たしていきました。しかし、これらの国々では、経済的な発展は立ち後れ、飢餓や干ばつをはじめ、民族間の対立などに直面していくことになります。こうした状況に対して、国際社会は1960年代以降、国連機関や NGO を中心に、「北」の「先進国」から「南」の“途上国”へ「開発援助 (development assistance)」を展開していくことになります。「開発援助」とは、「南」の国家や社会が秘めている可能性や潜在力を目に見える形にしておくこと、すなわち“途上国”の「国づくり」や「人づくり」を援助していくことであり、それが当時の国際社会の最優先課題だったわけです。

国連は1960年代から「国連開発の10年」という国際的なキャンペーンを展開していきますが、その成果が十分にあらなかったことから、開発援助のあり方が厳しく問い直されるようになります。その一方で、一部の国連機関や欧米の開発 NGO の中には、ただ“途上国”に援助金や援助物資を提供するのではなく、「南」の過酷な現状を“援助する側”の欧米諸国の人々に伝え、飢餓や貧困が起こる原因の所在や開発援助自体のあり方を考えていくための啓発活動を行うようになっていったのです。こうした活動はやがて欧米諸国の教育現場でも試みられるようになり、やがて「開発教育」と呼ばれるようになりました。

日本では、1970年代に紹介され、1980年代からその研究や実践が本格的に進められるようになりました。現在では、開発問題だけでなく、環境や人権、平和や文化、そして資源やエネルギーなど、人類が直面する地球規模の諸問題の解決を目指した教育学習活動として展開されるようになっていきます。このような活動内容の多様化を反映して、ヨーロッパでは地球的諸問題に取り組む教育学習活動を「グローバル教育 (global education)」や「グローバル・ラーニング (global learning)」と呼ぶようになっていきます。

21世紀を迎えてもなお、地球社会は早急な解決が待たれる人類共通の諸問題に直面しています。そうした深刻な問題群の解決に向けて、教育の果たすべき役割があるのか否か。これは「教育」の本質に関わる重大な論点だと思いますが、ユネスコ憲章が謳うように「人の心の中に平和の砦を築かなければならない」とすれば、教育が果たすべき役割はけっして小さくないと考えています。その「役割」とは何か。どうすればその「役割」を果たすことができるのか。それを考え、実践していくことが「研究室」の今後の課題です。

なお、開発教育に関してご関心のある方は、私が長く関わってきました (NPO 法人) 開発教育協会 (<http://www.dear.or.jp>) までお問い合わせください。

(2014年8月25日原稿受理)

博士録 26 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 26 回目には梅木研究室 OG の芦 暁博さんをお願いしました。

中国人日本語学習者の聴解学習に関するビリーフ研究

—中国の大学における日本語を主専攻とする大学生を対象に—

094604K 芦 暁博

● 論文の要旨

本研究では、中国の大学における日本語を主専攻とする大学生を研究対象として、アンケート調査、因子分析の手法を用いて、中国人日本語学習者が聴解学習と聴解学習ストラテジーに対してどのようなビリーフを持っているのかを明らかにすることを目指した。

第 1 章では、第二言語教育におけるストラテジーの概念を確認し、聴解学習ビリーフ研究、中国人日本語学習者の持つ聴解学習ビリーフ研究の必要性について述べた。

第 2 章では、BALLI という調査票を用いて調査を行った先駆的な Howitz、日本語教育における橋本、片桐、久保田などのビリーフに関する先行研究について眺め、聴解学習に関するビリーフ研究は、ほぼ皆無であることを確認した。

第 3 章では、中国に視点を移し、日本語教育の展開の概要を述べた後、指導要領にあたる『教学大綱』が現状に合わなくなっていること、中国人日本語学習者に関する先行研究の多くが聴解ストラテジーの解明や指導法を対象としていること、聴解の教科書が言語知識や正確さ重視から学習者参加型の内容に変化しつつあること、3名の大学の現職日本語教師に対するインタビューから、聴解教育の現場では標準的な指導方針がないこと、言語知識や正確さを重視した指導が行われる傾向があるということを述べた。

第 4 章では、2012(平成 24)年 4 月～6 月に中国の東北地方にある 3 大学で日本語を主専攻とする大学生 244 名を対象に行った聴解学習ビリーフと聴解学習ストラテジービリーフに関するアンケート調査、使用した調査ツール、分析方法について説明した。

第 5 章では、聴解学習ビリーフについて考察し、中国人日本語学習者の特徴が以下の 5 つにまとめられることを述べた。

①中国人日本語学習者の日本語学習の適性、②実利的な動機づけの傾向、③聴解学習における背景知識の役割の重視、④伝統的な教授法・教室活動への否定的な傾向、⑤聴解授業を担当する教師に対する指導法の期待

第 6 章では、聴解学習ストラテジービリーフの特徴について考察し、以下の 3 つにまとめられることを述べた。①メタ認知ストラテジーに対する強い肯定的なビリーフの傾向、②社会情意ストラテジーの役割の重視、③「音声と文字の結びつき」、「メモする」、「推測する」に対する高い評価。

第 7 章では、聴解学習ビリーフに潜在する因子を探るために行った因子分析の結果、①「聴解の効果に影響する要素への注目」、②「聴解学習の動機や目的の保持」、③「伝統的な学習方法と考え方の是認」、④「教師と補助教材への期待」、⑤「テキストの深い理

解の希望」、⑥「中国語による有利さ」、⑦「正確さ志向」の7因子が抽出され、聴解学習戦略ビリーフでは、①「能動的な聴き方志向」、②「メタ認知と社会情意ストラテジー志向」の2因子が抽出された。

各回答者の因子得点を算出し、その全体平均値を算出したところ、聴解学習ビリーフの場合、因子④「教師と補助教材への期待」の平均値が最も高く、賛成傾向を、一方因子③「伝統的な学習方法と考え方の是認」の平均値が最も低く、反対傾向を示す数値であった。聴解学習ストラテジービリーフに関しては、両因子とも因子得点が高く賛成傾向であった。

第8章では、先行研究および調査結果を踏まえた考察と今後の課題を述べた。

本研究の調査から中国人日本語学習者は伝統的な教授法・教室活動に対して否定的であり、背景知識の重視など新しい指導法を教師に期待していること、聴解学習ストラテジーに関しては全体的な特徴として、肯定的なビリーフを持つ傾向があることがわかった。このことから、中国人日本語学習者は、新たな聴解指導法や教室活動に対して肯定的であり、受け入れる素地が備わっていると言える。

編集注：ビリーフとは、学習者が言語学習、学習効果、指導方法などに対する意識的・無意識的に抱いている態度や信念のことである。

● 「舍得」

中国語には「舍得」という熟語があります。「惜しまない」という意味ですが、実はそれぞれの文字のもつ意味から理解すると、「舍得」は「捨てることによって得ることができる」となります。すなわち、「惜しまずに思い切って捨てれば、逆に得ることができるのだ」、という意味です。私は博士課程に在籍していた四年半を一つの言葉でまとめると「舍得」と言えます。

2006(平成18)年の9月、日本で日本語教育学を学ぶために、大学での日本語教師の仕事を辞め、中国から訪日しました。2年間の修士課程(2007(平成19)年博士前期課程に名称変更)を修了し、2009(平成21)年4月に博士後期課程に入学しました。後期二年次の頃、中国で息子が生まれました。当時早めに博士号を取得したいと思いましたので、息子を産んだ一ヶ月後にすぐ日本に戻りました。育児の大変さを体験していませんでしたが、子どもへの思いや両親へのお詫びという感情がいっぱいでした。一方、研究のほうもうまく進んでいませんでした。第二次発表までにも研究テーマが最終的に明確になっていなかったし、学会の発表も決まっていませんでした。更に、息子二歳の時(後期課程3年目)、父親が脳梗塞で倒れ、まだ幼い息子を保育園に送らなければなりません。母親に大きな負担をかけてしまいました。日本にいる私は当時、2択の問題に直面しました。Aは、ゴールが見えない後期課程を辞め帰国することです。Bは、今まで両親の苦勞、自分の努力を無駄にしないように、続けることです。

最後に B を決心した重要な要因は梅木由美子先生です。当時、梅木先生に家の事情を報告した後、慰める言葉より研究に励む言葉が沢山頂きました。結局、いつも笑顔で支えてくれる先生に「諦めます」、「やめます」のような言葉は口に出せませんでした。最終論文を提出する前に、先生は体調を崩してしまいました。長時間座れない先生が、家で休養する間でも、論文指導をしてくださいました。本当に感謝しております。また、宇都宮大学大学院国際学研究科の多くの先生方及び国際交流基金日本語国際センターの久保田美子先生のご指導のおかげで、本論文が完成できました。この場を借りて深く感謝の意を表します。

私にとって、この四年半、失ったことと言えば、息子の最初の成長や、親孝行かもしれませんが、得たものは博士号だけではなく、理想への執念、自分に対する自信、挑戦の勇氣など沢山あります。

「舍得」は人生の 2 択問題です。自分の信念を続ければ、失ったことより、きっとより多くのものが収穫できると思います。博士後期課程は誰にとっても大きな試練だと思いますが、「神様は乗り越えられる試練しか与えない」ので、目標に向かって頑張りましょう。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第 4 期修了生)

(2014 年 4 月 20 日原稿受理)

博士録 27 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 27 回目には市川研究室 OG の趙敏さんをお願いしました。

郁達夫における大正文学の受容

趙 敏

1. 論文の概要

新文化運動期から中国の近代文壇で活躍していた郁達夫 (Yu Dafu, 1896–1945 年) は、その活動が旧体詩、小説、随筆、評論などと多分野にわたり、中国近代文学の形成および発展に大きな功績を残している。本論文では、郁達夫と大正文学との関わりをとらえながら、彼の留学時代の文学的、思想的受容を考察した。

19 世紀末に、清朝政府は近代化を担う人材育成のため多くの人を海外に派遣した。中でもたくさんの青年が日本を訪れ、医学、理学、文学などあらゆる分野で学び、日本を介し、様々な先進的な技術や進歩的な思想などを中国に伝えた。中国近代文学が形成の過程において西欧から絶大な影響を受けたことは言うまでもない。しかし一方、その時代、一万人を超える知識人青年が近代化を学ぶため日本に派遣され、中には文学に転身した人も多くいたことから、彼らを通して中国近代文学が日本から影響を受けたことは否めないものと思われる。郁達夫はその中の一人で、文学者としてその役割を担っていた。

本論文では郁達夫と大正期の代表的な作家との比較により、主に佐藤春夫、芥川龍之介、田山花袋、谷崎潤一郎の受容から、小説の創作方法の特徴を中心に、郁達夫の文学形成と

大正文学の関連性を明らかにした。全七章により構成される。

序章では研究動機および問題意識、研究目的、研究方法を述べる。

第一章では郁達夫における大正文学の受容の概観を考察した。そこでは、郁達夫の留学生活および読書生活を考察し、また、新文化運動および大正文壇の影響を受けた、彼の文学活動の出発について検討した。さらに、郁達夫に関する日中両方の先行研究の状況をまとめた。

第一章を踏まえ、第二章以降では、具体的な作品分析を通じ、郁達夫における佐藤春夫、芥川龍之介、田山花袋、谷崎潤一郎のそれぞれの受容について、実証的に考察した。

終章では、郁達夫文学の特徴をまとめながら、大正文学の受容の結論を導き出した。また、不足点や、今後の課題などを述べた。

本論文では郁達夫と大正文学の関連性を考察し、大正文壇で大いに活躍した佐藤春夫、芥川龍之介、田山花袋、谷崎潤一郎などの作品との比較分析により、郁達夫の大正文学を通じての、詩的精神、芸術至上主義、自然主義および私小説、さらに都市文化の受容について検討した。郁達夫は積極的に大正の作家から創作の要素を取り入れ、自分なりの文学的思想と芸術的な個性を生み出し、他人が模倣できないような境地に達したといえるのである。

2. 後輩への助言

私は博士前期課程から博士後期課程修了までの六年間を市川研究室にて研究活動を行なってきました。博士課程の六年間はあっという間でしたが、先生方の豊かな知識と多様な指導法のおかげで多くの知識を身につけ、楽しく充実した日々を過ごすことができました。博士論文として完成できたことに、指導教員の市川先生をはじめ、国際学研究科の先生方の丁寧なご指導とご助言のおかげであり、心からお礼申し上げます。

論文作成にあたり、特に重要だと実感したことを以下皆様に伝えたいと思います。

まず、早期に研究構想を確立し、日ごろから指導教員とコミュニケーションをとることの重要性を実感しました。忙しくても毎週のゼミにできるだけ参加し、研究の進捗状況を指導教員に報告したり、他の院生とディスカッションしたりするなど、情報を共有することは研究に役立つと思います。

院生同士の相互交流は自身の研究活動にとって、よい刺激になるので、分野は違っても、研究に対する姿勢や、異なる考え方などが大変参考になると思います。また、他大学の院生たちとの交流を通じて、視野が広げられ、自分の研究内容をより深めることにつながります。

さらに、積極的に学会や研究会に参加することです。発表する度に必ず新しい発見や反省が見つかり、その積み重ねが自身を成長させてくれたことを実感しました。そして、学会では、多くの先生方からご指摘やご助言を頂けるので、思わぬ収穫が得られます。論文投稿や学会発表などを通して積極的に研究成果をアピールすることが大切です。

博士論文の執筆にあたり、しっかりとした研究計画や年間スケジュールなどを立てることが重要です。研究の実行を細部まで把握し、綿密に考えたほうがいいです。最初はある程度の余裕があると思いがちですが、自発的に行動しないとあっという間に三年間が経ってしまいます。実際書くには様々な問題点が出てくるはずなので、とにかく文章としてまとめるといいです。

これから研究活動および博士論文に取り組む院生たちには、私の体験と感想が少しでもお役立ちできれば幸いです。是非、博士課程の集大成を論文としてまとめ上げ、日々を大切にお過ごしください。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第10期修了生)

(2014年3月31日原稿受理)

知究人 24 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回はアメリカで編入学・卒業された石濱研究室OGの永山奏子さんをお願いしました。

「演劇業界を目指して」

永山 奏子

私は2013(平成25)年の1月に、State University of New York College at Oneonta (SUNY Oneonta) (ニューヨーク州立大学オネオンタ校)のDepartment of Theatre (演劇学部)に入学し、今年の5月に卒業しました。中学・高校時代に演劇部で活動しており、社会人になってからも趣味として演劇鑑賞をしていましたが、次第に舞台を制作する側になりたいという気持ちが強くなり、再度大学で学ぼうと思い留学しました。

私がいたSUNY Oneontaは、アップステートのオネオンタというとても小さな町にある大学です。ニューヨークと聞くとほとんどの方がマンハッタンなどの都会をイメージされると思いますが、それはニューヨークシティのみのことで、自然のとても多いのどかな町がたくさんあります。私が所属していたDepartment of Theatreは、生徒数が少ないため生徒同士の仲がとても良く、教授陣は全ての生徒の名前を覚えており、いつも親身に対応してくださいました。授業内容は、演技から舞台製作、演劇の歴史まで、演劇の基本を網羅できる内容になっています。私は舞台製作に興味があったので、セットのデザインやコスチュームデザイン、照明等を中心に勉強しました。また、1セメスターに2つずつ舞台を制作しており、大学内外からお客様がいらっしゃり観劇していただける機会があります。生徒は複数の作品に役者、もしくは裏方のスタッフとして参加することになっており、学んだ知識を生かして実践することができる仕組みになっています。私はプロップスマスターといって舞台上で使用される小道具の買い付けや制作、また管理する仕事や、ヘアメイクアップのアシスタント、またそのデザイナーを経験しました。

大学外でも、オネオンタ市にある複数の劇団や舞台の施設で照明のオペレーターやステ

ージクルー、またボックスオフィスでのチケット販売等の経験をさせていただきました。

卒業後はそのうちの一つの劇団でミュージカルのインターンもさせていただきました。この留学していた一年半は、多くの出会いもあった時間でした。アメリカだけでなく色々な国、スウェーデンや韓国、中国、インド等からの留学生との友人もでき、これまでの自分の価値観も大きく変わったと思います。祭日や長期休暇の際には友人の実家に泊めてもらい、素朴で温かいアメリカの暮らしを体験できたりと、人の優しさにもたくさん触れることのできた一年半でした。

帰国後も、舞台関係の仕事を探す予定です。難しい業種かとは思いますが、アメリカに来たことで、挑戦することへの楽しみを覚えました。また、日本ではできない経験をし、日本にいたら会えなかった人々と交流したことで、物事を前向きにとらえられるようになったと思います。今後困難もたくさんあると思いますが、これまで超えられなかった困難に直面した際、今の自分がどう対応できるかを楽しみに、頑張っていきたいと思います。

(国際学部 国際社会学科 第10期卒業生)

(2014年8月19日原稿受理)

海外だより 18 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は小池研究室OBの**田邊知成**さんをお願いしました。

「近況報告」

田邊 知成

国際交流基金の派遣日本語専門家という仕事をしております国際文化研究専攻第2期生の田邊知成と申します。この知求会ニュースのほうへは前回2009年12月、第32号にインドから寄稿させていただきました。結局インドには昨年5月まで、4年間お世話になりました。そして昨年12月からは新たな赴任地ミャンマー連邦共和国のヤンゴン外国語大学というところにお世話になっております。

顔立ちも違う、味覚も違う、宗教人口構成も日本とは大きく異なるインドから、そのすぐお隣のこの国に来てみると、やはりある種の親近感を覚えます。料理の味もぐっとわたしたちの感覚に近いものとなり、ここは東南アジアなのだと感じます。

しかし、一度マレーシアに住む友人がヤンゴンに遊びに来たときにこんなことを言いました。「初めてミャンマー料理を口にしたときは、ここは本当に東南アジアかよ、と思いましたよ」。彼いわく、どう考えてもミャンマー料理はかなりの割合でインド的であり、東南アジアのテイストっぽくはないということでした。

この国でメインディッシュとして並べられるのは「ヒン」と呼ばれる煮込み料理ですが、これはミャンマー人も英語で説明するときには「Curry」という表現を用います。煮込んでやわらかくなった肉などの料理を、こちらの人たちは皿に盛ったごはんの上にとり、適度にごはんを混ぜるようになって食べるのですが、たしかにこれはインドの流儀と言っ

てよいものでしょう。

インドを経由してミャンマーに来たわたしから見れば、その具材になるものはインドカレーではなく、中華料理に近いもので、多少のスパイスは使用されるものの、その味のベースは魚醤や「ンガピ」というエビの発酵ペーストなど、要するに「ダシ文化」です。

マレーシアに長く住み、ASEAN 諸国もいろいろと訪れている友人が「この国はほとんど南アジアだ」と感じ、インドでの 4 年間の生活を終え、この地に赴任してきたわたしが「この国はやっぱり東南アジアだ」と感じている。確かにこの国には両者がうまく混ざり合ったような文化が花開いています。人々の営みが長い歴史の中で繰り返され、醸し出されてきた文化というものは、その境界においてかようにグラデーションを形成しているものなのですね。

「Indo-China という半島名に象徴される東南アジア各国は、それぞれの度合いで中国とインドからの影響を受けている」というのは「バダウ〜ビルマよもやま話ⁱ」という WEB ページを主催する落合清司氏のことばですが、特に中国・インド両国と直接国境を接しているミャンマーは多分にその影響を受けています。わたしはあと数年、この国の日本語教育を支援していくこととなりますが、過去に中国に留学し、日本語教師として中国、インドと関わってきた者として、ミャンマーというフィールドはまさにわたしのこれまでの経歴を活かすためにあるのではないかとさえ感じています。すでに着任半年を過ぎましたが、この国をより理解し、この国の日本語の先生方、学習者たちと信頼関係を築いていけたらと思っています。

i 「バダウ〜ビルマよもやま話」 <http://www.badauk.com/index.html>

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 2 期修了生)

(2014 年 8 月 21 日原稿受理)

海外留学今昔 14 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 08 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「留学生アドバイザー活動 -留学生支援を通じた学生同士の国際交流-」

留学生アドバイザー代表 堀部 聖人

留学生アドバイザーは、留学生の支援及び留学生と日本人学生との交流推進に関わる学生団体として、2013(平成 25)年の 4 月に発足しました。宇都宮大学には 305 名ほどの留学生が在籍しており、中国やマレーシアなどのアジアの国々のみならず、スロバキア、イタ

リア、ガボン、チュニジア、メキシコなどヨーロッパ、アフリカ、中南米の国々から来ている留学生もいます。こうした多様なニーズに応えられるよう、留学生アドバイザーは日本人学生だけでなく、学部留学生も活動に携わっており、留学生からの声を大切にしています。

留学生アドバイザーの主な活動としては、3つあります。第一に、月に一度のイベントの企画です。学期始まった月には新しく日本に来た留学生へのウェルカムパーティーをやり、学期が終わるころには国に帰国する留学生への送別会をやっていきます。また、5月は運動会、10月はハロウィーン、12月はクリスマスなど毎月テーマを決め、留学生と日本人学生が楽しく交流できるようなイベントを企画しています。第二に、留学生が来日した時の出迎えや市役所等の手続きの補助です。来日当初は留学生もわからないことが多く、できるだけ留学生の負担を軽くできよう、出迎えや手続きの補助に努めています。さらには、留学生の履修相談や初級日本語指導の補助など、学業の面においても可能な範囲で留学生のサポートに関わっています。第三に、チューターとの連携です。宇都宮大学には、留学生アドバイザー以外にもマンツーマンで留学生をサポートするチューター制度があり、チューターとの話し合いを通して情報共有をしています。

留学生アドバイザーの活動を通して、日本にいなながらも留学しているように感じるが多々あります。時には互いの文化や価値観の違いに苦しんだり、時には日本の国際関係に関して熱く語り合ったり、日本人同士のみでの交流からでは得られない刺激を留学生から日々受けています。留学生を支援することだけではなく、留学生と関わるなかで互いに学び、互いを尊重して助け合っていくことが、宇都宮大学の留学生アドバイザーが目指している形です。留学生が宇都宮大学で有意義な留学生活を送れ、宇都宮大学に留学してよかったと思えるような環境づくりを目指して、これからも活動していきます。また、留学生の学友として、お互いの理解を深めていくことで、今後の日本社会のグローバル化に貢献できるよう努めていきます。

(国際学部 国際社会学科 4年生)

(2014年8月26日原稿受理)

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2014年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は執筆予定者から入稿がなかったのでお休みです。

